

マレーシア華人社会における儀礼の変容

—中元節の事例から—

Transformation of Rituals in Contemporary Chinese-Malaysian Society:

The Case of the Hungry Ghost Festival

櫻田涼子

SAKURADA Ryoko

Most Southeast Asian countries have certain amount of Chinese population as their nation. Among those countries, Malaysia has comparatively large population of ethnic Chinese, and therefore Chinese-Malaysian show wide variety of Chineseness and Chinese culture.

Though Chinese in Malaysia show strong and wide variety of Chineseness compared to other counterparts in Southeast Asia, it does not immediately mean that Chinese-Malaysian are strong holder of sense of Chineseness as if they have just arrived from China. Chinese in Malaysia have localized cultural values, localized Chinese festivals, and ways of living and those are only seen in Chinese-Malaysian social world. In this sense, they are no more “Chinese”, but localized “Chinese-Malaysian”. Due to multi-ethnic social environment, Malaysia has no choice but cooperating with each ethnic group: Malay, Indians, and Chinese in order to uphold healthy relationships.

In this paper, presenting the ritual case of the Hungry Ghost Festival in Chinese-Malaysian community in southern province of Johor, I would attempt to discuss Chinese-Malaysian ritual and culture is widely open to public eyes and other ethnic groups' presence in the context of Malaysia as multiethnic nation. The Hungry Ghost Festival which is assumed as traditional cultural index of Chinese should be analyzed as flexible entity.

I はじめに

マレーシアは複数のエスニックグループが居住する多民族国家である。2002年のセンサスによるとマレーシアの総人口は約2453万人で、その中でマレー人や先住民をひとつにまとめたエスニックカテゴリーであるブミプトラ (Bumiputera)¹⁾ は約1596万人 (65.1%) でマレーシア最大のエスニックグループを形成し、次に五大幫 (福建・広東・潮州・客家・海南)²⁾ のサブカテゴリーからなる中国系マレーシア人 (以下「マレーシア華人」もしくは「華人」と称する) が約637万人 (26%) でマレーシア第二の規模のエスニックグループを成し、以下インド系マレーシア人が約188万人 (7.7%) と続く。

学校や公的機関においては主に国語であるマレーシア語が使われ (稀に英語が使われることもあるが)、家庭や仲間内においてはエスニックグループごとに異なるそれぞれの母語が使用されるのが普通である。それに加えてエスニックグループごとに信仰する宗教が異なるマレーシアにおいて、言語や宗教と密接に結びついた習慣や禁忌がエスニックグループごとに異なり、そこから派生するエスニックアイデンティティは非常に多様なものとなっている。「多民族国家マレーシア」という文脈において、マレーシア華人も他エスニックグループとは明確な差異、つまり福建語や広東語といった各中国語方言や道教・仏教などの宗教、民間信仰に基づく日常的な習慣や禁忌、華語教育などといった華人性 (Chineseness) を表出する。

Purcellは「マラヤ (独立以前のマレーシア) の中国人社会において中国的信仰と迷信が深く浸透しており、欧米人との接触により近代化の影響を受けているにもかかわらず中国文化を強く保持しているのは、伝統的な習慣と迷信とに彼らが盲目的に追従するためだ」(Purcell 1967 [1948]: 289) と述べているが、確かにタイやインドネシアといった周辺諸国の華人社会と比較して、マレーシア華人は極めて高い自立性や中国文化、伝統を保持していると語る傾向がある³⁾。仮に上記のPurcellの分析が正しいと仮定しても、なぜマレーシア華人は周辺諸国の華人に比べて「伝統的な習慣と迷信とに盲目的に追従し中国文化を保持してきた」のかという点、またなぜマレーシア華人だけが強固な華人性とともに語られるのかという点は明らかにされてはこなかった。しかしながらこのような固定的な視座は現在でも遍く華人研究において認められるもので、OngとNoniniも、華人研究をするものの多くが華人のアイデンティティを本質的で中国文化の長い伝統に影響され、非華人社会においても永続するものとして語ることを指摘している (Ong and Nonini 1997: 8)。

1) ブミプトラ (Bumiputera) はマレーシア語で「土地の子」を意味する。このエスニックカテゴリーには、セマン、セノイ、イバン、ビダユ、カダザンなどのオラン・アスリ (Orang Asli) と称される先住民、マレー社会に同化したスマトラからの移住者、そしてマレー人が属する。

2) 「幫 (バン)」とは、同郷同胞による相互扶助を目的とした連体組織のことで、幫は幫助の語源ともされ、中国の同郷やまた同業関係で組織された集団のことを指す。主に、籍貫 (しゃくかん) と呼ばれる出身地を同じくする同郷集団により組織される地縁集団である郷幫 (例: 福建幫, 広東幫, 客家幫など) と、ギルド的性格を持つ同業集団により組織される業幫などがある。ここでいう五大幫とは「郷幫」である福建幫, 広東幫, 潮州幫, 客家幫, 海南幫の五つを指している。

3) 例えばMinority Rights Groupの報告書によれば、マレーシアは東南アジアで最も包括的な華語教育が行なわれている地域である (Minority Rights Group: 19) とされ、その近隣諸国には見られないマレーシア華人社会の「文化の自立性」が指摘されている。

マレーシア華人研究ではこれまで華人エスニシティが主たる研究関心となり、他エスニック集団であるマレー人、インド系マレーシア人との政治経済的的局面における関係性やアメリカ、カナダ、香港、シンガポールなどの海外華人や中国華南の僑郷の中国人とのネットワークなどが中心的に論じられてきた。このような研究に見られるマレーシア華人像はまさに華僑の「僑」の字が示すような一時的な仮住まいをする中国人の姿に重なり、ここから明らかになるマレーシア華人像からは、マレーシアという場所に生きる、そこに根付いた彼らの生活を読み取ることは出来ずに一面的なレベルの華人イメージの再生産に終始していたといえるのではないだろうか。

このようなディスコースが華人研究の大勢を占める中で、マレーシア華人社会の儀礼研究においても華人社会で行われる儀礼は「伝統的」で「本質的」なものであり、マレーシア華人の「中国的な」アイデンティティを醸成する制度として固定的に語られる傾向にあった。マレーシア華人社会を「かえって漢文化の意識的かつ具体的内容について、祖籍地の漢文化よりは、より明確な情報入手することができる」（渡邊 1991：273）場と想定し、漢民族社会の延長線上にマレーシア華人社会を据えてその実態を捉えようとする視点には、マレーシアという文脈、すなわち華人と他エスニックグループとの様々なレベルでの関係性の考察がすっぽりと抜け落ちているため、平板な華人分析、ひいては「伝統的社会に生きる人々」といった語りに終始してしまうのではないだろうか。従って「華人は中国的価値観と信仰を強く持ち続けている」という点から出発せずに、なぜそのように見えるのか、そして華人性はどのような文脈で現在に至るのかという視座からマレーシア華人の研究を行なわなければならないと考える。つまり、次節のマレーシア華人略史で詳細に述べるが、マレーシアという国民国家が形成される過程で、マレー人との政治的取引により国教としてのイスラム教や国語としてのマレー語、マレー人の特権を認めるという点で華人社会がマジョリティであるマレー人に譲歩する代わりに教育や言語、経済活動といった華人の権利を勝ち取ってきた経緯に着目し、マレーシアという文脈における華人の他者との関係性をその分析に加味しなければ、マレーシア華人の実態は明らかにならないものと思われる。

そこで本稿では、マレーシア華人社会で広く行なわれる中元節の儀礼過程から、多民族社会マレーシアという文脈において、いかに儀礼が変容し再構築された意味内容や形式を併せ持ちながら定着しているかを示し、中元節儀礼が華人社会における単なる「伝統的」で「本質的」な儀礼なのではなく、マレーシアという多民族国家における他者との関係性から再構築されたものとして示したい。

II マレーシア華人社会のなりたち

中国からマレー半島への人の移動は早くは5世紀から認められるが、中国人コミュニティが顕著になるのは、1511年のポルトガルのマラッカ占領以後のことである。福建省出身の貿易商がマラッカに住み始めるようになると、マレー人女性との通婚を経て現地化しババ⁴⁾と呼ばれるようになり、

4) 海峡華人（海峡植民地僑生華人, Straits Chinese）は、男性がババ（峇峇, Baba）女性がニヨニヤ（娘惹, Nyonya）と呼ばれ、マレー語ではPeranakanと称される。

中国人コミュニティを形成し始めたのがマレーシア華人社会の黎明期である。その後マラッカの支配権が1641年にポルトガルからオランダへ、そして1795年にオランダからイギリスへと移っても中国人社会は存在し続けた。

ポルトガルによるマラヤ占領後、ババは主にイギリスが海峡植民地として統治したマラッカ、ペナン、シンガポールに居住したことから「海峡華人 (Straits Chinese)」と呼ばれた。一方で、19世紀後半からのイギリスによる大規模なマレー半島におけるスズ鉱山、ゴム農園を中心とした開発が行われ、イギリス植民地経済を下支えする労働力として19世紀末からマラヤに大量流入した中国人労働者(「苦力」)は、スズ鉱山に集団で居住し、「海峡華人」とは違ったコミュニティを形成するようになる⁵⁾。彼らの多くは単身でマラヤに渡った出稼ぎ的な性格の強い労働者たちで、定住の歴史が比較的長い「海峡華人」とは異なり定住することが少なかった。しかし移民の数が急増するにつれ、またマラヤにおける移住の制限が緩和され経済的に安定するようになると家族を中国の僑郷から呼び寄せる者や、配偶者を見つけて定住するものが増加し、「海峡華人」コミュニティの他にスズ鉱山やゴム農園の労働者コミュニティや都市部の商業コミュニティなど様々な華人社会が形成されるようになった。本節ではマレーシアという文脈にマレーシア華人社会を据え本稿の問題関心の基本的前提を明らかにする為に概略的なマレーシア華人史を示したい。

1 多様化する華人の価値観

華人社会形成初期は、古くからマラヤに定住しイギリス植民地政府に登用された比較的豊かな「海峡華人」と、植民地政府の労働力として大量移入された「苦力」とに単純に二元化された状態にあったが、マラヤ独立期までには、華人社会は様々な価値観と政党に代表される多様な社会となった。

マラヤ独立以前(1946-1947年頃)、華人は比較的自立的な政治・経済的権利を享受していた。しかし1946年1月のマラヤ連合発足以降、一度は華人やインド系住民に対するこれらの権利付与を承認したスルタン(マレー諸王国の君主)らは、各州の主権・自治権が侵害されるとの理由から「非マレー系住民」に対する権利付与の反対に転じ、またマレー人の特権廃止を憂いたマレー人知識層の反対を発端に、マレー人の特権を擁護する政治機運は高まっていた。これを受けマラヤ初のマレー系政治組織、統一マレー人国民組織(United Malays National Organization, UMNO)が結成された。一方イギリス植民地政府は、華人社会のリーダーに対してマラヤ華人協会(馬華公会, Malayan Chinese Association, MCA)⁶⁾を成立するよう促した。それはMCAの存在によりマラヤ共産党(Malayan Communist Party, MCP)を弱体化させるという目論みもあったのだが、同時にマラヤ独立にむけUMNOとMCAの協調関係を構築するのがその大きな目的であった。こうして1949年1月、MCAは華人社会の保守派指導者である元マラヤ公明党(The Kuomintang Malaya, KMTM)のリーダー、中華会館や教育界の代表者、英語教育を受けた資本家・実業家・専門家を統合する形で

5) 本稿では海峡華人社会の分析は行わないので、海峡華人やババの詳細はここでは割愛する。海峡華人に関しては張木欽(2000)やTan(2000)に詳しい。

6) 1963年以降はMalaysian Chinese Associationとして知られるようになる。

成立した⁷⁾。

MCAと、マラヤインド人会議 (Malayan Indian Congress, MIC) は、できる限り早い時期に独立を果たすという党方針で一致し、そこにUMNOが加わり1955年初の総選挙勝利により三党の協調体制は更に強まった。三党はマラヤ独立という点において意見は一致したが、MCAは①イスラムを国教とすること、②マレー語を唯一の公用語とすること、③華語 (北京語) は公用語化しないこと、そして④マレー人の特権を認めるという4点をUMNOに譲歩した (政治的取引)。これは1948年のマラヤ連邦合意 (Federation of Malaya Agreement) のマレー人の特権を保証したことにより、すでに華人の主張は制限を受けていたためである。この合意により華人は上記4点のマレー人に対する特権付与を認めることになったが、その代わり出生地主義に基づく市民権取得に法律が切り替えられ、これにより当時の華人人口の約3分の2がマラヤ国籍を取得し、マレー人の特権付与に関して華人の経済活動が制限されぬよう憲法に条項が盛り込まれた⁸⁾。

マラヤ連邦が1957年に独立すると、マラヤ連邦憲法 (Constitution of the Federation of Malaya) により、国民を「マレー人」と「非マレー系住民」とに区別し、マレー人の権利を保護、優遇する諸規定が定められるようになる。それに続き「マレー人の特別な地位」が強調されるようになる⁹⁾、マレー的価値観の優先、マレー人の権利保護を目的に憲法第160条によって、「マレー人はイスラム教を信奉し、日常的にマレー語を話し、マレー人の習慣 (adat) に従う者」と明確に定義され¹⁰⁾、1970年代以降、マレーシアのエスニック政策を特徴付ける「ブミプトラ政策」(Bumiputera Policy)¹¹⁾へと受け継がれるようになった。

マラヤが独立を果たし初代首相のトゥンク・アブドゥル・ラーマン (Tunku Abdul Rahman) が民主主義、経済活動に対する自由放任主義を採ったため、この時期の華人は経済利益を十分に享受し、なおかつ政治参加も活発に行っていた。MCAの党首、陳修信 (タン・シウシン) は1957年か

7) 当初のMCA党员には党首を務めた陳禎祿 (タン・チェンロック)、彼の息子で後にマラヤ最初の金融大臣となった陳修信 (タン・シウシン)、中華総商会の設立に尽力し最初の委員長に就任した李孝式 (リ・カオシ)、そしてマラッカ州最初の州知事に就任することになった梁宇舉 (レオン・ユーコー)、華人人口の多いペラ州の中華会館のまとめ役の劉伯鞏 (ラオ・バックァン) などがいた。

8) “Nothing in this Article shall empower Parliament to restrict business or trade solely for the purpose of reservations for Malays” Article 153.

9) 具体的内容としては、マレー人の信奉するイスラム教を国教とする (憲法3条)、マレー語の国語および公用語化 (憲法第152条)、国家元首である国王を連邦内9つの州の統治者 (Sultan) による互選で決定する (憲法第32条)、マレー語による国民教育を行うこと (1957年教育令)、また「マレー人の特別な地位」として公務員職の登用、奨学金等に関する便宜供与、商取引や事業に関する認可証付与に関するマレー人に対する優先的割当枠 (クォータ) 制度の設定 (憲法第153条) などがある。

10) マレー的価値観の優先、マレー人の特権の擁護が憲法により規定はされたが、非マレー系住民の権利も政治的取引の結果、ある程度擁護された。例えば言語に関しては「他の言語の使用 (公用目的を除く)、教授、学習を妨げたり禁止はしない」 (憲法第152条) との言及がされ、華語、タミル語、英語を教授用語とする学校が認められた (後に英語学校は廃止され、華語・タミル語の中等教育レベルの学校も1962年に廃止される) また、マレー人の特権に関しても「非マレー系住民の既得権益を侵してはならない」との条項が加えられ、宗教に関しても「イスラム教は国教である。ただし他の宗教も平和と調和の下に実践される」 (憲法第3条) という但し書きがあり、インド系、華人が信仰する宗教の信仰の自由が保障されている (金子2000: 83-84)。

11) ブミプトラ政策は、先住民を一つのカテゴリーに組み入れ多数派を設定し、彼らに優遇措置をとることにより、エスニックグループ間の経済・社会的格差の是正を図ろうとする政策である。

ら1961年にかけて通産省大臣を、1961年から1974年にかけて大蔵省大臣を務め、経済政策を決定する上で重要な役割を果たした。またMCAがUMNO、MICとの同盟関係を結ぶ上で、陳修信とトゥンク・アブドゥル・ラーマンの個人的なつながりが重要な鍵となったといわれる（金子 2000）。両者の協調関係により自由な経済活動がある程度保障されたため、華人経済は順調に伸び、マラヤ独立期に既に顕著であったマレー人と華人の所得差はさらに拡大することとなった¹²⁾。

独立以降、MCAが華人社会を代表する政党として華人社会の要望や意見を代弁してきたが、1950年代終盤にかけて華人系野党勢力も目立つようになる。例えば1954年に結成された労働党（Labor Party）は華人が中心の多民族政党で、当初は英語教育を受けた華人が主流であったが、急進的な華語教育を受けた華人が指導者層を占めるようになってからは、特に社会主義的な傾向を強め、1959年の総選挙では新村（戦中戦後の共産ゲリラ活動を支えた農村部の華人不法占拠民を再編成させる目的で1950年代に作られたコミュニティのことで、New VillageもしくはKampong Baruと呼ばれた）の華人票を多く勝ち取るようになった。この時期労働党と票を争うことになった華人系野党は、ペラ州を中心に活動する人民進歩党（People's Progressive Party, PPP）¹³⁾、ペナン州を中心とする統一民主党（United Democratic Party: UDP）¹⁴⁾ などがあった。民主行動党のほかには1968年に結成されたマレーシア民政行動党（Gerakan Rakyat Malaysia, Malaysian People's Movement）がある。マレーシア民政行動党は、元MCA、統一民主党の党首であった林蒼佑（リム・チョンユ）と元労働党党首の陳志勳（タン・チークン）を含む貿易商、専門職、大学教員などの知識人のマルチエスニックな指導者層により結成された。人権問題への取り組みと、開かれた民主主義を標榜し、社会改革政党と認識されたマレーシア人民運動党は、他の華人政党に比べマレーシア政治におけるエスニック集団の統合的方法を模索する政党として活動の場を広げた。この時期になるとこのように華人社会を代表する華人政党が増加し、華人社会形成初期のような単純に二元化された社会から、徐々に華人の価値観が多様化し様々な政党や組織により形成されつつあることが伺える。

2 エスニックグループ間の緊張関係と華人社会

このように多様化する価値観を受けて華人系野党が林立するようになるが、各政党がそれぞれのエスニックグループの利益保護を中心とした政策を打ち出すようになると、エスニックグループ間の緊張が次第に高まるようになった。

1959年、1964年の総選挙において優勢であったMCAは、1969年になると一転し、議席、支持率ともに急激に落ち込む一方で、華人系野党のDAPとマレーシア人民運動党の急激な躍進が顕著となった。UMNOもMCAほどではないが、1969年の総選挙ではUMNOにとって最大の野党である汎

12) Hengによれば、1957年に華人の平均月収は108.8米ドル、マレー人は57.6米ドルであった。1970年には華人は157.6米ドル、マレー人は68.8米ドルとその差はさらに大きくなった。

13) 人民進歩党は、スリランカ人に率いられた政党であったが、ペラ州のキンタ地区（スズ鉱山地区）における華人の支持をうまく取り付けるのに成功した。

14) 統一民主党は元MCA党首の林蒼佑（リム・チョンユ）により作られた政党である。彼は1959年7月、UMNOから政治的、文化的な面で華人に対しある程度譲歩するように求めたが失敗し、そのためMCAを辞任している。

マラヤ・イスラーム党 (Pan-Malaysian Islamic Party, Parti Islam Se-Malaya, PAS) に対し敗退した。その最大の原因は、マレー人の経済状況が大幅に立ち遅れているのに対しUMNOが何ら有効な策を取ってこなかったため不満の鬱積したマレー人が、マレー人の経済状況の向上を政策の中心に据えたPASを支持したからである。

この頃、各エスニックグループの政治・経済利益、文化・言語保存に対する要求から、野党 (マレーシア人民運動党Gerakan, DAP, PAS等) が台頭するようになり、DAPが連合政権を破った1969年の総選挙の結果を受けMCAの指導者層は、連合政権から抜けずに政権から退くことを決めた。1969年5月13日、クアラルンプールでは華人青年グループによるDAPの選挙結果を受けてのデモ行進が行なわれた。これに対しマレー人青年グループが対抗デモを起こし、エスニックグループ間の緊張は一気に高まり民族暴動に発展した。暴動後の華人社会は激震を迎えることとなる。1970年7月には、国家運営評議会により緊急条例が公布され、扇動法 (Sedition Act) が改正された。これにより市民権、国語、マレー人の特権、非マレー人の合法的権利、マレー人スルタンの特権と主権に関する一切の議論が禁止された。また同年8月末の独立記念日式典では国王により、神への信仰、国王及び国家への忠誠、憲法の遵守、法による統合、良識ある行動と徳性の五原則からなる「国家理念」(Ruku Negara) が発表された。経済面ではマレー人優先主義が制度化され、華人経済は様々な制約を受けるようになった。また英語教育も1970年になると廃止され、マレー語学校に順次切り替えられるようになり、マレー語を教授用語とする大学が増加し、マレーシアはマレー色の強い国家へと変貌を遂げた。

独立以後の急激な政治的变化の中で、政治経済的自立性を喪失しつつあることに脅威を感じた多くの華人政治家が「華人大団結 (Chinese Great Unity)」を標語に掲げるようになった。多様な価値観を持ち幫派ごとの差異の大きいマレーシア華人コミュニティを、言語や中国文化をマレーシアという文脈に合わせて操作することにより一枚岩の強固なものにしようと試み、エスニックグループとしての華人社会の権利を統一的に主張していく馬華公会 (Malayan Chinese Association)、中華総商会 (Chinese Chamber of Commerce) などの制度が徐々に整備された。華人社会全体で積極的に言語・教育・文化の維持に取り組むことにより、マレーシア華人の存在感と権利をマレー文化が優勢なマレーシアにおいて印象付け、強固なものにしていこうとする華人社会の取り組みが広く見られるようになる。華人政党を形成する政治家や、華語教育に心血を注ぐ教育者などのポリティカルリーダーの華人社会の大同団結を求める政治的な試みと、このような社会背景に後押しされ、それまでは比較的小規模に各幫ごとに行なわれていた華人の儀礼祭祀も、ひとつの華人社会を代表するマレーシア華人の儀礼として再構築されるようになっていくのである。

次節では華人社会で広く行なわれている中元節をひとつの事例として示し、マレーシア華人社会で広く行なわれるこの儀礼も華人文化が脅かされる状況から再構築された多民族国家マレーシア社会における創造物のひとつであり、元来言われてきた「伝統的中国社会の儀礼様式をそのまま残すもの」という語りでは捉えられないものであることを述べる。

Ⅲ マレーシア華人社会における中元節

1 中元節の儀礼概要

漢民族社会では、死者・霊の祭祀を主目的とする清明節、中元節、冬至が「三大鬼節」として広く行なわれている（旧暦10月1日の寒食節を含め四大鬼節とする場合もある）。この鬼節の中でも特に旧暦7月15日の中元節は、漢民族社会の広い地域において最も盛大に行なわれている祖霊祭祀儀礼である（何 2003）。中元節は死者や霊の祭祀を目的とするところから鬼節と呼ばれるが、他にも漢民族社会の地域により七月半、作半段、中元、普度、盂蘭盆会など様々な名称で呼ばれることが知られている。その中で最も一般的である中元という語は道教の三元節・三官大帝信仰に由来するといわれる。三官儀礼は、天官を祀る旧暦1月15日の上元節、地官を祀る旧暦7月15日の中元節、水官祀る旧暦10月15日の下元節からなる。天界が陽の象徴であるならば、地界は陰の象徴である。陰界の鬼門が開き孤魂や鬼が陽界に現れるとされる中元節に、地の神である地官は祀られる。そして水の神、水官はかつて齋食が行われた下元節の際に祀られたが、それは20世紀初頭までのことで現在のマレーシアでは下元節はほとんど行われぬ。しかしながら水官が水にまつわる神格であることから、漁師など水に関わる職業に就く者の間には水官信仰が残っており、下元節には漁に出る前に水官に供物を捧げるなどの儀礼が行なわれている。

(1) 道教由来としての中元節

道教では中元節である旧暦7月15日に太上老君と原始天尊が人間の言行に関し話し合いをし、そこに土公（中元地官）が地上の人間の善行と悪行を報告しに上がると考えられている。旧暦7月は鬼門が開き、人間の住む陽界に孤魂や鬼が出現し、土公の判定を受けるため地獄の苦しみから逃れられる年に一度の機会とされる。したがって鬼門が開く旧暦7月1日の前夜と鬼門が閉じる7月30日には祖先の霊と、帰るところのない孤魂に対し供奉が行われる。このため中元節は施餓鬼と称されることもある。

なお既に述べたように中元節は三元節の一つ、土公に関わる節日であるが、マレーシア華人社会ではあまり広く下元節が行われていない。そのためか中元節に水公に関する儀礼も行なう地域もある。特にベナン島など海に近い華人コミュニティでは中元節に「出海典」が行われるようである（Wong 1967 : 141）。これは特に漁師や海産物の卸問屋、小売商の華人らが海に出た際に、孤魂の「好兄弟」に取り憑かれ命を落とすことがないようにと「好兄弟」を同業者仲間として祀るものである。また中元節には漁師や海産物業を営む者が中心となって劇団を招致する（Wong 1976 : 141）。筆者の調査地では、水公に関する儀礼は中元節の間は全く見られなかったが、それは地理的に海や河川から遠い場所に調査地が位置し、漁師や海産物業を営む華人が少ないためと考えられる。

(2) 仏教由来としての中元節

マレーシア華人社会では中元節という呼称以外に盂蘭盆会または普渡が使われるのが一般的である。盂蘭盆会という名称は仏教伝承に基づくもので、サンスクリット語のullambanaの音訳に由来し、そこでは親に対する孝心が説かれる。盂蘭盆会は『大蔵経』にある「目蓮得道救母」の説話に

基づいている。目蓮 (Maudgalyayana) 尊師は、生前に罪を犯した母が地獄で餓鬼に邪魔され思うように食事が取れず苦しむ様子を目にし、仏主に救いを求め盂蘭盆経を授けられる。目蓮は旧暦7月15日に盂蘭盆に果物を盛り十方の大徳衆僧に供養すれば祖先や父母は三途の苦しみから逃れることが出来ると説かれ、熱心に供養したという。それ以来目蓮の孝心を称え盂蘭盆会が行われるようになった。一方、普度というのは仏教用語の中国語訳「普度衆生」の略であり (何 2003: 65)、つまりは魂を苦悩から救済することで、仏教寺院で行う済度法事の名である。マレーシア華人社会においては、仏教寺院に限らずコミュニティで行われる中元節をもさして盂蘭盆会や普度という呼称が使われる場合が多い。

中元節は上述のように仏教説話と不即不離でありながら、実際には道教由来の伝説とも関連した華人の年中行事の中でも重要な儀礼のひとつである。

2 中元節の儀礼概要

(1) 調査地概要

本稿で取り上げる中元節儀礼の事例は、マレー半島南部に位置するジョホール州の上端のT町で観察されたものである。T町は人口約3万人の静かな小さい町である。クアラルンプールやジョホールバル、マラッカといった都市部へ車で2時間程度の距離にあり、若者の多くはT町を離れ都市部に出て働いているケースが目立つ。このT町の中心部から1.5キロメートルの距離にある地区を仮にTTJとする。このTTJ地区の中心地において観察された中元節儀礼をここでは事例として記す。TTJ地区は1980年前後に造成された300戸ほどのテラスハウスと呼ばれる集合住宅郡 (主に平屋) を中心に発展したコミュニティで、現在では周辺地区に新しく造成中の住宅地も含めれば1000戸以上からなる比較的大きな住宅地区である。テラスハウスはマレーシア全土に見られる住宅形態であるが、特に華人が多く居住する住宅形態であるため、TTJ地区は総世帯数の8割以上を華人が占める地域となっている。なおTTJ地区のメインストリートには中華料理店が数軒並び、華人の儀礼には欠かせない紙銭や金銀紙等の儀礼用品を売る店、葬儀屋、中元節を運営実行するための盂蘭勝会運営事務所、華人政党のMCA事務所などが立ち並び、ここが華人コミュニティであることを明確に物語っている。

(2) 中元節儀礼過程

筆者が観察した中元節はTTJ地区中心部に位置する広場で2000年8月16日から18日まで3日間に渡って行なわれた。中元節はこのコミュニティで組織されたものの他に、同業会、幫、同郷会館等が組織するものがあり、コミュニティの成員は様々な所属組織の中元節の会に重層的に参加していた。例えば、観察したTTJ盂蘭勝会慶讃中元の他には、同時期に客家系華人による盂蘭盆会がTTJ地区で行われておりコミュニティの客家系華人はTTJ盂蘭勝会慶讃中元と客家系盂蘭勝会慶讃中元のどちらにも顔を出す者がいたし、また筆者が住み込んだ家の家長はトラック運転手の同業会による盂蘭盆会に参加し、その妻はTTJ盂蘭勝会慶讃中元に参加していた。このように中元節は決してコミュニティにおいて一元的な儀礼ではなく、成員の所属カテゴリーに応じて組織されるものである。この点はコミュニティ内部の関係性を考察する上で見逃すことはできないが、ここではコミュ

ニティで最も盛大に行なわれるTTJ孟蘭勝会慶讃中元に焦点をあて分析するため、儀礼組織にみる華人コミュニティ内部の関係性分析は後の機会に行ないたい。

① 儀礼一日目、二日目

TTJ孟蘭勝会慶讃中元は8月16日から始まったが、実質的に広場に人が集まり神壇にて拜拜がされるのは17日以降のことであった。17日夜になると、広場で行われる興行（華人歌手による演唱会と岡劇）に人々が集まり一番の賑わいを見せた。伝統的に福建系華人コミュニティの中元節では岡劇劇団による岡劇が行われるが、観客は年々減少し、前座として行われる演唱会には老若男女の人々が多数聴き入っていたが、その人気に比べると岡劇観客は極端に少なく、数人の子どもたちが見ているに過ぎなかった。その子どもたちも数時間に渡る演目が淡々と演じられていくうちに、一人また一人とその舞台前から消えていき、夜が更ける頃には誰も観ていないという瞬間もあった。

興行が行われている戯棚（舞台）の隣の広場では、鉄架（テント）内で女性たちが雑談しながら紙銭で元宝銭を作っていた。これは翌18日の儀礼最終日に紙製の「西方船」を燃やす際に使われ、これにより中元節の期間に人間界である陽界に現れた祖先の霊や孤魂が冥界に送り返される。Appendix1に示した図はTTJ孟蘭勝会慶讃中元の儀礼空間を示したものである。図下部に示した鉄架内部には既に供物が運び込まれ、神壇には拜拜に訪れる者が、右側には紙銭を折る女性や子供が、左側には軽食を取りながら談笑する男性たちが集まり、夜遅くまで祭場は賑わっていた。岡劇劇団が三演目全てを演じ終えた頃、正炉主と副炉主が西方船を会場に運び込んだ。この西方船は儀礼最終日に祭場近くの広場で焼かれることとなっていた。昨年からは供物泥棒が増えたため¹⁵⁾、副炉主や世話人が当番で夜通し会場の見張りを行うことになっていた。他の住民は後片付けをして会場を後にした。

② 儀礼三日目

翌日18日、朝から女性は世間話をしながら前日に引き続き元宝銭を作り、男性は鉄架内左側に陣取り女性が用意した饅頭や粥をコーヒーとともに食べながら談笑していた。全ての供物（发糕（蒸しパン）、粽子（ちまき）、ザボン、金豚（祭壇に供える豚の丸焼き）、鴨、鶏、柑、バナナ、リンゴ等）が鉄架前方の神壇に置かれると、道士による読経が始まった。道士（または師公（サイコン）とも称する）による読経は日に何度も繰り返して断続して行われる。道士が道士補佐の笛、銅、鉦の調子に合わせて読経を始めると、それまで談笑していた男性たちは神壇前に集まり道士に続いて線香を手に拜拜を行ない、磕頭（跪き頭を垂れて行う拜拜）を行う。この時、紙銭を折る女性たちの多くはそのまま紙銭を折り続け道士の行う拜拜には参加しない。しかし天公炉での女性の拜拜は一日中行なわれていた。そこでは鉄架内で作業する女性だけではなく、小さな子供を連れた女性や、買い物帰りのビニール袋をぶら下げた女性が拜拜を行っていた。また月経中の女性は天公炉での拜拜も行なうことができないが、紙銭作成などで儀礼空間に参加することは可能であった。

午後2時、道士による長い読経が終わると卜炉が行われた。卜炉は翌年の孟蘭勝会の正副炉主を、

15) 「近年はT町にもインドネシアからの出稼ぎ労働者が増加し、人がいなくなる夜中を狙って供物や儀礼の分配品を盗む輩が増えた。昨年はインドネシア人に分配用のバケツをゴッソリ盗まれたので、やむなく見張りをするのだ」と世話人は述べた。

ポエという竹製の半月形の一对の占い道具を使い決定するものである。卜炉は次期盂蘭勝会の炉主を希望する者が中心となって1人10回ポエを投じ、陰陽（一对のポエを投げたときに出る平たい面と凸面の組み合わせにより陰陽が判断される）の出た回数が多いものから正炉主、副炉主を決めるものである。炉主に選出されると次期の盂蘭勝会まで1年間香炉を預かり、自宅の正庁に香炉を据えて朝晩丁寧に祀る。炉主になるものは責任が重く出費も多いが、とりわけ神の恩寵に預かり得ると信じられているため毎年10人以上の候補者が出る。翌年の炉主が決まる度にポエを覗き込む人の輪から大きな歓声上がる。

翌年の正副炉主決定後、16日夜に戯棚で岡劇を行った岡劇劇団員による賀寿が行われる。これは「添丁添財添寿」すなわち男児・財・長寿をもたらす象徴である「天仙送子」と称する人形が二手に分かれた劇団員の間をやり取りされるもので、劇団員が演じる象徴的男女の間で聖なる子供である太子が神前でやり取りされることにより、「添丁添財添寿」が地域にもたらされる。このやり取りが終了すると「跳加長」という役に扮した踊り手が前方の神壇に向かい「合境平安」と書かれた縦長の垂れ幕をかざし、この劇団員による儀礼は終わる。この「合境平安」は、地域社会の安寧平和を願う意味がこめられている。こうして劇団員は神に対しては奉納劇を納め、コミュニティに対しては合境平安が祈願・祝福されるのである（渡邊 1991）。

しばらくして道士が生米、硬貨、菓子、タバコなどを人々に向かって投じる。米粒一つでも持ち帰ることが招福の象徴であると考えられているため、鉄架で紙銭を作っていた女性や子供たちも前方に集まり、道士が投げる菓子や硬貨を拾い集める。その後、TTJ地区の華人若年層により組織された「恵湖醒獅隊」により舞獅子が行われた。戯棚前の広場に円を描くように8個の柑を、そしてその中央にザボンを置き、獅子がザボンに切れ込みを入れ神壇に供する。獅子は戯棚前の広場から鉄架内の神壇までの儀礼空間をくまなく練り歩き、孤魂や鬼が現れている空間に福を招来しようと激しく舞う。そして道士の先導で西方船が神壇の一段下にある広場に運ばれ、元宝銭と共に火が放たれ燃やされた。西方船を燃やすことにより陽界にあらわれた祖先の霊や孤魂、鬼が陰間に戻ると考えられているため、西方船を燃やす儀式をもって施餓鬼が主なる目的である盂蘭勝会は終了するのである。

マレーシア・ペナン島で中元節を観察した渡邊によれば、西方船を焼き孤魂や鬼を地界に送る儀礼はペナン島では行われておらず、代わりに神壇に大士爺が祀られ儀礼最後に大士爺が焼かれるという。この大士爺を焼く「送神」によりこの世に浮遊する孤魂や鬼、また災いの根源をみなあの世に持って行ってもらう（渡邊 1991）という。TTJ盂蘭勝会慶讃中元では「送神」は行われずまた大士爺も神壇には祀られていなかった。しかしTTJ地区の別地域で行なわれていた客家系盂蘭盆会では大士爺が神壇に置かれていたので、盂蘭盆会終了時には西方船ではなく大士爺を燃して「送神」が行なわれた可能性がある。

③ 中元節の終わり－分牲礼と宴会

道士による儀礼が終了すると、鉄架内に置かれていた供物が分配される分牲礼が行われた。供物台に置かれた13頭のコブ豚（豚の丸焼き）が世話人により切り分けられ、盂蘭勝会に参加した住民の積立金で用意された分配品が引換券と交換で配られた。分牲礼の分配品は赤いバケツに入った米粉

(ビーフン)、インスタントラーメン10袋、落花生、オレンジ、菓子類、三角旗と米5キロ、食用油2リットル、焼き菓子などの食料品が中心である。これは供物を「分配し持ち帰ること」が招福・迎福に結びつき、家庭に安寧をもたらすと考えられるため行われるものである。夕方までには会場に置かれていた全ての供物が分配され鉄架内の机はすっかり片付けられ、夜の宴会の準備が始まる。

孟蘭勝会にむけてTTJ地区の多くの住民が一家庭100リング（2000年当時の約3000円）の積立をし、各家庭に分牲礼の供物引き換え券と宴会の参加券（1人分）が運営委員会から配布された。多くの場合、分牲礼の供物引き換えは各家庭の女性が行い、宴会には家長が参加するが女性の宴会への参加も多く見られた。また事前に積立金をしなくとも当日50リング（約1500円）払えば宴会に参加することもできた。その日も午前中からテント内で親戚の女性と話しながら紙銭を折っていた女性は、分牲礼の頃までそこに残り娘を呼び出して分配されたバケツを娘と共に自宅まで持ち帰った。自宅に着くとバケツの食料品の山のでっぺんに刺してあった旗をホールの祭壇に供え、食料品を取り出しては「去年と同じビスケットだわ」だとか「このブランドのお米はあまり美味しくないんだけどなあ」などと娘と話しながら台所の戸棚に次々と閉まっていった。あたりが暗くなる頃に行われる宴会の時刻まで自宅で過ごし、水浴びをしてからござっぱりとした、いつもより綺麗なよそ行きの洋服を身に着けて、娘と近所に住む親族女性と連れ立って宴会の行われる儀礼空間に再び出かけていった。

宴会会場に円卓が25卓ほど並べられ、中央前方にこれから競売に掛けられる炉主や華人政治家からの供物、積立金で購入した供物が15点ほど並べられていた。次々と連れ立って現れる人々は談笑しながら、テントの神棚がある卓は男性が多く着席し、中央の競売にかけられる物品が並ぶ台の付近には政治家やコミュニティリーダー、儀礼の主催者である炉主などが座った。神棚から一番離れた卓は女性たちが陣取った。こうして200人以上の参加者が着席し食事が開始されると、T町出身の華人政治家が華語教育や華人文化の保持、華人コミュニティの更なる団結を訴求するスピーチを行い、いよいよ競売が始まる。この競売は孟蘭勝会の終わりを飾る大きな催し物であり、正炉主の供物がいくらかで競り落とされるか人々の期待は高まる。供物には財神画、縁起の良い置物、菓子類などがあり、それぞれに出品者の名が明記されている。最も福があると考えられている正炉主による供物から順に競りに掛けられ、競売品には最高で2000リング（約60,000円）もの大金が付き、また比較的値段の高くない供物（食用油など）に及ぶと主婦や若者も参加し会場は大変賑やかに盛り上がる。この競りで得られた供物も分牲礼の分配品と同じく、招福・迎福の象徴と考えられており、また儀礼最終日の賑やかで楽しい雰囲気にもまれた競りはまるで娯楽のように会場を盛り上げ、参加者は熱心に競りに参加する。競売で集まった収益金はTTJ孟蘭勝会慶讃中元の名の下、T町の二校の華語小学校や華人文化を維持促進する団体へ寄付される。またTTJ孟蘭勝会慶讃中元の運営費として一部が蓄えられ、孟蘭勝会の備品を購入しまた翌年の孟蘭勝会の準備金とされる。この宴会の食事が終了するとTTJ地区での孟蘭勝会は終了する。

以上本節ではTTJ孟蘭勝会慶讃中元の儀礼過程を概観した。マレーシア華人にとり中元節とは元来、仏教説話を由来とする施餓鬼を行い現世での福祿寿を確かなものにし、そして祖先拜祭を行い

祖先に対し敬意を払う機会である。しかしながらここで見てきた中元節の儀礼過程からは、元来の由来や信仰枠組みを踏襲しながらも新しい意味内容が盛り込まれている様が伺える。次節ではここから見えてくる儀礼の変容と定着の様相をまとめ、その意義をマレーシア華人社会の文脈から考察したい。

Ⅳ まとめにかえて一儀礼の変容とその意義

前節冒頭ですでに述べたように、元來中元節は陽界の一般居民と神靈界の交流儀礼として行われるものである。しかし同時に「分牲礼」、「宴会」また道士による象徴的な供物分配を通して人々に神饌を分配することにより、社会の底辺にいる人々の救済をおこなうという実利的な側面もある(渡邊 1991)と考えられている。マレーシア華人社会において中元節は、他の年中儀礼や寺廟で行なわれる祭祀と比べ、特に重要な行事と位置付けられ、前節で見てきたように地区単位で大々的に行なわれている。寺廟で行われる儀礼祭祀は主に男性が参加するのに対し、中元節は、積極的に拜拝儀礼に参加することは稀ではあるが女性(特に主婦)も多く参加して紙銭を折りコーヒーを飲みながら世間話に花を咲かせる姿が印象的であった。それぞれの家庭で行われる年中行事や、コミュニティ内にいくつもある様々な神格の寺廟の儀礼祭祀に見られないコミュニティにおける連帯感が現れる場所がこの中元節儀礼なのではないだろうか。

特に儀礼の最後に行なわれる大々的な宴会と競売は、元來中元節儀礼には見られなかった性質のものであるが、これらは儀礼の最後を飾るアトラクションイベントとして参加者の心を捉えており、もはやこの饗宴と競りなくして中元節は終わらないと感じられるほどにコミュニティの人々の中に定着しているようである。

元來陰間の祖先や浮かばれない餓鬼を施すために行われる中元節儀礼は、神靈界の祖先や餓鬼を施すことによりこの世に生きる人間、子孫が安寧を得るために行うあの世とこの世の間の象徴的な交換儀礼であった。圧倒的な不幸や不穏な出来事を未然に防ぐために餓鬼や「好兄弟」への施しは行われ、そのことにより安寧と平安は約束されるのである。このような中元節儀礼における神靈界と人間界の象徴的交換は、マレーシア華人社会を安定させ、そして一般居民への富の分配が行われる機会に読み換えられ再構築されたものであると考えられないだろうか。地元出身の政治家、コミュニティリーダー的性格を持つ「頭家」が多く参加し、彼らによる布施が大規模に行われているところからも、中元節は宴会の競売や募金により集められた富を分配することによって、華人社会を底上げしその存在を確固たるものとし、またこれが華人社会の維持発展を図る機会として機能しているとはいえないだろうか。

中元節の目的は、①陽界に食を求めて出現する孤霊や鬼に対して人間が財物を投じて施す代わりに、鬼魂からの災禍を免れ平安を獲得する、②現世利益の具体化という形式を経ての「迎福」、の二つがある(渡邊 1991)。前節の中元節儀礼概要でみたように、①の目的が中元節の本来の儀礼目的であったと考えられる。したがってこれに準じる形で行なわれた施餓鬼のための供物準備や拜拝、紙銭・元宝銭と西方船に火が点じられ孤鬼を陰間に送るといった儀礼行為は、いわゆる「伝統的」

な儀礼枠組みの範疇にあるといえるだろう。

しかし災いを免れるための消極的理由のみによる中元節の履行（つまり①の目的による）は、現世利益的華人社会においては好まれない傾向がある。大規模な饗宴を行い、華人政治家やコミュニティリーダーである頭家が饗宴で演説をするということ、競売や募金による収益金が華人文化の普及のための基金活動、慈善事業、華語教育事業、華語学校へ寄付され華人社会全体の向上が目的とされる点は孤魂への布施である①に対して、「人間への布施」（社会福祉の側面）という観点（渡邊1991）から捉えることができるかもしれないが、マレーシアというマルチエスニックな環境において「維護華教」というスローガンを宗教儀礼に盛り込むことの意義を考える時、中元節儀礼が華人の存在と権利を主張し、「強い華人社会」を維持し、ポリティカルリーダーを中心とした自立的なコミュニティが現在でも華人社会に根付き機能しているということを他エスニック集団に対して言明する行為として浮きあがってくる。中元節という本来ならば華人コミュニティ内部で完結するはずの儀礼は、華人社会が持つ伝統文化保持に対する強い意思とそれを維持していく団結力を見せ付けるための契機としてマレーシア華人社会に必要とされ、熱心に行われていると考えるとき、中元節は伝統的な華人の宗教儀礼の枠組みのみにあるのではなく、マレーシアという他エスニックグループの存在が常にその前提となる文脈において行われる儀礼であるということがより明白となる。

マレーシア華人は巧みに中元節儀礼の①と②の目的を組み合わせて中元節儀礼を実践することにより、華人社会の宗教・教育・言語を包摂した「華人文化」を再構築しているのではないだろうか。他エスニックグループ（特にマレー人）を意識して社会状況に即して変化する儀礼として中元節を分析することにより、従来の固定的語りからは明らかにならなかったマレーシアという多民族社会に生きる彼らの歴史性や他者との関係性の実際が見えてくるのではないだろうか。

参考文献

- 何彬.2003.「訪れる靈魂－中元節・お盆の主役たち－」『アジア遊学』勉誠出版 58号60-71ページ。
 金子芳樹.2000.『マレーシアの政治とエスニシティ－華人政治と国民統合－』晃洋書房。
 窪徳忠.1999.『道教の神々』講談社学術文庫。
 櫻田涼子.2003.「マレーシア華人社会における儀礼の変容とその意義－中元節（盂蘭盆会）の事例から－」『族』筑波大学民族学研究室 34号1-20ページ。
 直江広治.1987.「マレーシア華人社会における地縁的・業縁的・血縁的団体の組織・機能ならびにその信仰的基盤について」直江・窪編『東南アジア華人社会の宗教文化』南斗書房。
 中村喬.1988.『中国の年中行事』平凡社。
 ——1989.『続 中国の年中行事』平凡社。
 渡邊欣雄.1987.「マレーシア・ペナン島における中元節の儀礼過程 一祭区の事例報告」直江・窪編『東南アジア華人社会の宗教文化に関する調査研究』南斗書房。
 ——1991.『漢民族の宗教 社会人類学的研究』第一書房。

- 張木欽·叶德明.2000.『荷兰街口夕陽斜 爸爸文化：一次文化統合的奇登經驗』大将時亜社。
- 林廷輝·宋婉莹.2000.『馬來西亜華人新村五十年』華社研究中心出版。
- 周宗廉·周宗新·李華玲.1992.『中国民間的神』湖南文芸出版社。
- Chang Pat Foh. 1993. *Chinese Festivals Customs and Practices in Sarawak*. Sarawak, Lee Ming Press Co.
- Cheu, Hock Tong (ed.), 1993. *Chinese Beliefs and Practices in Southeast Asia*. Selangor, Malaysia, Pelanduk Publications.
- Debernardi, Jean. 2004. *Rites of Belonging: Memory, Modernity, and Identity in a Malaysian Chinese Community*. Stanford, Stanford University Press.
- Department of Statistics Malaysia. 2003. “Year Book of Statistics, Malaysia” Department of Statistics Malaysia.
- Heng, Pek Koon, 1999. “Malaysia” Lynn Pan, (ed.), *The Encyclopedia of the Chinese Overseas*. Cambridge, Massachusetts: Oxford University Press.
- Minority Rights Group(ed.), 1992. *The Chinese of South-east Asia*. London, Minority Rights Group.
- Musium Negara Malaysia. *Exhibition on Chinese New Year Celebration in Malaysia-At Muzium Negara - at Muzium Negara from February 10th 1983 to March 20th 1983*. 1983. Malaysia, Department of National Unity, Malaysia.
- Ong, Aihwa, and Donald Nonini. (eds.), 1997. *Ungrounded Empires: The Cultural Politics of Modern Chinese Transnationalism*. New York, Routledge.
- Tey, Nai Peng. 2002. “The Demographic Situation of Malaysian Chinese” Suryadinata Leo (ed.), *Ethnic Chinese in Singapore and Malaysia: A Dialogue between Tradition and Modernity*. Singapore, Times Academic Press.
- Victor, Purcell. 1967 [1948]. *The Chinese in Malaya*. Kuala Lumpur, Oxford University Press.
- Wong, C. S. 1967. *A Cycle of Chinese Festivities*. Singapore, Malaysia Publishing House Limited.

Appendix 1 TTJ孟蘭勝会慶讚中元の祭場図

